ジョン・ストーリー 著
鈴木健、越智博美 訳
『ポップ・カルチャー批評の理論：現代思想とカルチュラル・スタディーズ』

（小鳥遊書房、2023年）

カルチュラル・スタディーズ、あるいは略してカルスタが日本に入ってきてから久しい。本書はそのカルチュラル・スタディーズの入門書として9版を数えるJohn Storeyの *Cultural Theory and Popular Culture: An Introduction*の翻訳である。すでに韓国語、ウクライナ語、スペイン語、アラビア語、中国語、ギリシア語での翻訳が刊行されている、言ってみれば定番の本である。

カルチュラル・スタディーズという学問分野は、1960年代にこの領域の先駆者であるリチャード・ホガートを初代所長としてバーミンガム大学に設立された現代文化研究センターを中心として伝播した。当初はホガート、あるいはレイモンド・ウィリアムズが（マシュー・アーノルド的な）文化を高級な文化に限定する定義に抗いながら「文化」の意味を刷新した仕事、たとえば労働者階級にも独自の文化があるというあらたな認識に多くを負いつつ、その後あらためてスチュアート・ホールが所長の時代にルイ・アルチュセール、あるいはアントーニオ・グラムシの理論を導入しながら、わたしたちの平生の生活を形作るさまざまな文化的な事象に――テレビを見る、本を読む、音楽を聴く、服を身に纏うといった、日々の文化にも目を向けつつ――批判的な分析のまなざしを向ける。

著者ストーリーは、現代文化研究センターの最良のレガシーの一人である。本書が9版を数えるあいだにはさまざまな出来事があったが、ストーリーは、つねに最新の文化事象についても書き加えて、カルチュラル・スタディーズの射程を示して見せている。今回の第9版では、2020年代になって注目度があがっている用語、たとえば「インターセクショナリティ」や、文化現象としての「ブラック・ライヴズ・マター（BLM）」についてもあらたなセクションをたてて加筆をおこなっている。

わたしたちの生きる社会では、こうした事象がポピュラーな文化とともにあることは言うまでもない。BLMにせよ、#MeToo運動にせよ、たとえばSNSはその伝播には欠かせない。SNSは、ヘイト・スピーチの場、あるいは旧来のステレオタイプが再生産されてしまう場でもあると同時に、力を持たぬものが、「わたしも(Me Too)」と声を共に上げることにより、小さな声を大きくし、現状に介入しうる場でもある。そしてその時に考えねばならないことは、こうした運動が抗議対象とする人種主義や性差別にはそれぞれに社会的、政治的、経済的な歴史があり、そうした力関係のなかで差別を助長するステレオタイプや通念が作られてきたということだ。そうした複合的な要素を理解することによって、BLMや#MeTooが単なるその時だけの騒がしい運動ではなく、極めて根深い現象に対する抵抗であることも見えてくる。グローバル化が進む社会において生きていく自分を考えるための武器という意味でも、この学問にはまだなすべき課題は多い。